

Information

SUMMER FORUM

第 43 回サマーフォーラムを開催しました

8/28（金）『第 43 回地域医療連携サマーフォーラム』が開催されました。本フォーラムは、近隣の医療機関の皆さまと当院が「顔の見える連携」を築き、地域の医療ネットワークを強化するために毎年行われているものです。



当日は講演者として「内科 原一彰先生」と「循環器内科 金村俊先生」の 2 名が登壇しました。地域の医療従事者が多数集まった会場では、それぞれの発表をもとに、活発な意見交換が行われました。今後も皆さまが安心して最適な医療を受けられるよう地域の先生方との絆をさらに深め、スムーズな医療提供に努めてまいります。

第 34 回若葉区民まつり



開催日：令和 8 年 1 1 月 1 日（日）10:00～15:00

会場：東京情報大学（千葉市若葉区御成台 4-1）

雨天時：荒天中止

内容：舞台、模擬店、産直市、フリーマーケット
スポーツイベントなど

主催：若葉区民まつり実行委員会

11 月 1 日(日)開催される若葉区民まつりに今年も出展します。当院は血糖測定、骨密度測定、健康相談を行っています。ぜひお立ち寄りください！



医療法人社団誠馨会

千葉中央メディカルセンター

〒264-0017 千葉県千葉市若葉区加曾利町1835-1

☎043-232-3691

千葉中央メディカルセンター

検索

詳細はこちら



医療法人社団 誠馨会

千葉中央メディカルセンター ニュース 第98号

発刊：2026.10.20

編集：CCMC 広報委員会

1 面：内科 2 面：ACP について 3 面：看護師インターンシップ 4 面：Information

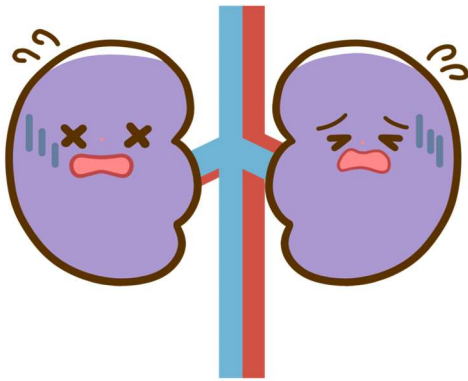
特集： 糖尿病性腎症と IgA 腎症

内科部長/腎臓内科・人工透析内科

原 一彰

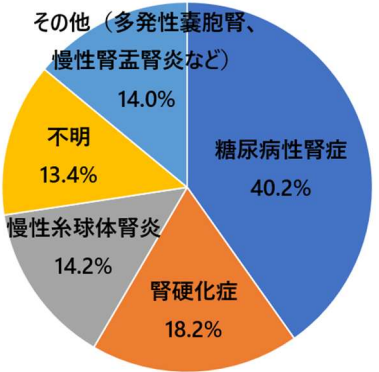
千葉中央メディカルセンター内科の原一彰と申します。本年のサマーフォーラムでは、「糖尿病性腎症の経過中に急性腎障害を来し IgA 腎症と診断された一例」を発表いたしました。

症例は 44 歳男性です。入院 7 年前に HbA1C 10.4% となり当院紹介受診されました。糖尿病として外来にて経過観察されておりましたが、入院 4 年前の 7 月に咽頭痛出現、これ以後断続的に血尿が出現するようになりました。入院 2 年前より徐々に腎機能増悪が見られるようになり、入院年度の 1 月に下痢と体調不良を主訴とし来院、腎機能障害の増悪を認め入院となりました。入院後は毎日補液 2000ml/day 実施しましたが尿がでない状態が続き、入院 5 日目には透析が必要な状態まで腎機能が増悪したため緊急透析導入となりました。尿検査では血尿著明であり、入院 14 日目に腎生検を実施し、糖尿病性腎症と IgA 腎症の合併が考えられました。乏尿および腎機能障害が持続し、透析からの離脱は困難と判断され維持透析の方針となり、入院 14 日目に左前腕内シャント造設術施行されました。維持透析継続の方針となり、入院 29 日目に退院となりました。本症例では、糖尿病性腎症と IgA 腎症という二つの腎疾患の合併を認めました。糖尿病性腎症は我が国で最も多い末期腎不全の原因であり、末期腎不全の 4 割を占める腎疾患です。



一方、IgA 腎症とは我が国で最も多い慢性糸球体腎炎の原因疾患です。IgA とは、咽頭にある扁桃に多く出現する免疫グロブリン（菌と闘うためのたんぱく質の一種）ですが、何らかの原因で IgA が腎臓に沈着し、腎臓に炎症を引き起こす疾患です。糖尿病性腎症は最も多い腎障害の原因ではありますが、血尿を伴う疾患ではないため経過としては非典型的な症例でありました。糖尿病と腎障害であっても、血尿などの非典型的な所見を有する症例では腎疾患の原因について再度の鑑別を要すると考えられました。

本症例のような慢性腎臓病（CKD）の発見・加療には、定期的な健康診断が必須です。すでに壊れた腎臓を元に戻すことは現在の科学では不可能であり、CKD とは一生付き合っていくことになりますが、適切な介入を行えば少しでも腎臓の寿命を延ばしていける可能性があります。CKD の主な加療は、降圧と減塩による腎臓への負担軽減です。投薬はもちろんのこと生活習慣の見直しが必要であり、医療者だけの力では不十分です。医療サイドと患者サイドがチームプレイで対処し、信頼関係が必要な治療です。幸い、日本では健診に尿検査が入っていることが多く、早期発見がしやすい体制があります。健診で異常があった場合には、ぜひ当科を受診いただければと考えています。



院内倫理委員会と看護部が支える“その人らしい人生の生き方を支える”ために

入退院支援センター/専従看護師
板山 祐子

当院所在の千葉市若葉区は、2025 年から 2026 年現在にかけて、高齢化率（65 歳以上の人人口に占める割合）が約 30.7%となっており、千葉市 6 区の中で最も高い（1 位）状態です。最も低い中央区とは 9 ポイントのひらきがあります。こうした地域の変化に合わせ、当院では「住み慣れた地域で、できるだけ自分らしく暮らし続けたい」という思いを大切にす医療・ケアを、組織理念の「信頼と奉仕」に則り進めています。その中心となっているものの一つが、院内倫理委員会と看護部の取り組みです。

● もしもに備える「人生会議」

～最後まで自分らしく住み慣れた地域で暮らすために～

誰しも、大きな病気やケガをして、また、年齢とともに低下する認知面の問題などから、これからの治療やケアについて自分で決められなくなる「もしも」の時が訪れるかもしれません。厚生労働省では、国民が最後まで自身の価値観を大切に、自分らしい選択ができるようにするための手引きとして、「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関する指針」や「ACP（アドバンス・ケア・プランニング）に関する指針」「高齢者ケアの意思決定プロセス指針」を定めています。ACP とは、将来の医療やケアについて、本人・家族・医療者が共に考え、話し合い、本人の思いを尊重し、共有していく取り組みです。

当院では、院内倫理委員会が中心となってこの指針に関する研修会を続けています。また、看護部では、ACP を日々のケアに生かすために、看護倫理委員会を中心に活動しています。毎月、各病棟から「倫理的な悩みを含む事例」を持ち寄り、委員会で発表し、意見交換を行っています。例えば、「治療を続けたい気持ちと、苦痛を減らしたい気持ちの間で揺れる患者さん」「家族の思いと本人の思いが一致しない場面」「生活の背景が治療選択に影響する」など、看護師が日々向き合う看護の場面を病棟ごとに共有し、「どのようにすればその人らしい看護につながるか」を話し合っています。

病気が進行した際の最終段階の医療の選択は、治療内容を決めるだけではありません。「どこで過ごしたいか」「どんなことを大切にしたいか」「家族に負担をかけたくない」「できるだけ痛みをなくして欲しい」こうした“生活の思い”を含めて、医療者と家族と一緒に考えることが大切です。急な病状の変化で自分の希望を伝えられなくなることがあります。だからこそ、元気なうちから家族や医療者と話し合い、思いを共有しておくことが、“自分らしい人生を生きる”につながります。

● 患者・家族向けの ACP 動画を準備中

当院では、ACP をもっと身近に感じてもらえるよう、患者さん・ご家族向けの動画を作成しています。「人生会議って何?」「どんなことを話し合えばいいの?」「家族と考えが違ふときはどうしたらいい?」こうした疑問にやさしく答える内容で、外来や病棟で視聴できるよう準備を進めています。また、患者さん自身が思いを整理できるよう「人生会議ノート（意思決定ノート）」の導入も検討しています。外来や入院のタイミングで記入していただくことで、早い段階から患者さんの価値観を把握し、退院支援や在宅療養につなげることができるよう活動中です。

病を抱えながらも、「住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けたい」という思いは、多くの方々に共通する願いだと思います。倫理委員会での学びを現場に還元しながら、ACP(意思決定支援)の視点を日々のケアに組み込み、患者さん一人ひとりの人生に寄り添う医療・看護の提供を今後とも続けて参ります。



看護師インターンシップ

ゼロ距離だからこそ伝わる、看護師の仕事と病院のリアル
～看護師インターンシップを開催しました～

業務管理課/採用担当
野村 真理奈

2026 年 7 月 29 日、8 月 20 日の 2 日間、2027・2028 年卒業予定の看護学生を対象とした看護師インターンシップを開催しました。

今回のインターンシップでは、学生の皆さんに、実際の医療現場に触れながら「看護師になったら自分はどんなことがしたいのか」「どんな病院で働きたいのか」を考えてもらうことを目的としました。病院のホームページやパンフレットだけでは、なかなか伝わりにくいことがあります。実際に病院へ足を運び、そこで働くスタッフと出会い、現場の空気を感じる。そんな“ゼロ距離”の体験だからこそ分かる、病院の雰囲気や看護師の仕事を知ってもらう機会となりました。当日は、普段体験することのできない模擬採血に挑戦したほか、手術室ではガウンテクニックを体験。実際の現場を想像しながら、看護師の仕事の一部を体験してもらいました。



模擬採血



ガウンテクニック体験

また、患者さんを支えるのは看護師だけではなく、さまざまな職種がそれぞれの専門性を生かし、連携しながら医療を提供しています。インターンシップでは、看護部だけではなく、他職種との関わりにも触れてもらい、チーム医療の大切さを感じてもらう時間にもなりました。

体験の合間には、病院近隣の「ルイスクラシック」さんにご協力いただき、サンドイッチセットを昼食としてご用意しました。さらに院長からはアイスの差し入れをいただき、現場の看護師と一緒に、ほっと一息つきながら、リラックスした雰囲気の中で昼食を楽しみました。



ルイスクラシック サンドイッチセット

「実際に働いてみてどうですか?」「病院の雰囲気は?」「仕事で大変なことは?」など、学生の皆さんからの質問も多く、普段は聞きにくいことも含めて、看護師が自身の経験を交えながらお話ししました。仕事のやりがいだけでなく、病院で働く“リアル”を知ってもらえる貴重な時間となりました。

そして最後には、当院の「生活彩家ポプラ」で販売している焼き立てパンをお土産としてプレゼント。体験だけでなく、食事や会話を通して、当院をより身近に感じてもらうたのではないのでしょうか。

今回のインターンシップが、参加した皆さんにとって「自分はどんな看護師になりたいのか」を考えるきっかけとなり、これからの進路を選ぶ際の一助となれば嬉しく思います。